

## 中国に伝存の日本関係典籍と文化財

著者	笠谷 和比古
雑誌名	中国に伝存の日本関係典籍と文化財
巻	17
ページ	1
発行年	2002-03-29
その他のタイトル	Chugoku ni denzon no Nihon kankei tenseki to bunkazai
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00002979">http://doi.org/10.15055/00002979</a>

# 中国に伝存の日本関係典籍と文化財

近代の以前・以後とを問わず、日本関係文献・絵画・工芸品などで、諸々の事情の下に中国国内へ移動、流出したものは相当の点数に及んでいることが予想される。

日本と中国の歴史的関係は古くかつ新しい。とりわけ前近代の各時代を貫く文化的な関係の歴史は連綿として続いている。文化の伝達、影響、交流に中心的な役割を担ってきた文物の一つが書物である。書物は国際的に移動する。外交、貿易、留学から移民、植民地支配まで、移動の契機は多面的である。日本と中国との間における書物の移動もまた同様であろう。このうち、中国から日本に将来された漢籍については、その伝来の経緯と所蔵に関する研究が古くよりなされ、今日それらの全貌を包括的に把握することができる。これに対して、日本国内から中国に移動、流出して、同地に伝存していると思われる書物については、それらの移動の契機と所在をめぐる研究は、近年ようやくその緒についたところであると言ってよいであろう。

これまで日本関係の文物で、欧米方面に流出したものに関しては、国の内外の研究者の手によって、その流出の実態解明がかなり進められてきた。特にヨーロッパにおいては、その全域に所在する図書館・文書館が毎年会合を重ねて情報交換を行うE A J R Sの活動によって、それら日本関係文物の伝存状態に関する全貌が次第に明らかにされつつある。

これに対して中国方面に移動、流出したものについて見るならば、古くは阿部隆一氏の『中国訪書志』といった労作があり、近年では中国浙江大学王宝平教授を中心として、中国全土の図書館・檔案館の協力のもとに進められた漢籍和刻本および日本人の手になる漢文著作に関する所在調査がある。

しかしながら中国の国土は広大であり、台湾地域をも含めてなお調査を必要とする箇所は多数にのぼるとともに、他方では上述の先行する調査では、もっぱら和刻本を中心とする漢籍に関心が集中していて、和書や古文書および各種の文化財といった種類のものには関心が向けられることは少なく、その実態の解明が求められているのが現状である。

これら中国（台湾を含む）に伝存する日本関係典籍・文書および文化財を対象として、国際日本文化研究センターでは科学研究費（題名「明治期に中国へ流出した日本寺院旧蔵文書に関する総合的研究」）の交付をうけたうえで1998年から2000年までの3年次にわたり、研究分担者の方々および中国側の日本関係典籍等の所蔵機関の御協力のもとに中国各地の調査を実施してきた。

そして本年2月19日から同22日までの4日間にわたり、国際日本文化研究センターにおいて日中両国研究者の参加のもとにその総括シンポジウムを開催し、3年次にわたる数多くの調査報告に基づく情報交換と、精力的な討議をとおして多大の成果を上げることが出来た。本書は同シンポジウムおよび公開講演会の内容を収録した国際集会の報告集である。